「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」

―黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（抜刷本）から―

亜細亜大学名誉教授
亜細亜学園理事　夜久正雄

一、我が国民生活は外来文化との接触によって前後二回の重大転機に遭遇したのである。
　云々。（「序説」二ページ）

二、十七條憲法のお言葉
　一に曰く、和を以て貴しとなし、忤ふことなきを宗と為す。云々。（二二四ページ）
　十に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。云々。（五五ページ）
　十四に曰く、群卿百寮、嫉妬有ること無れ。云々。（二二七ページ）

三、三経義疏のお言葉
　仍ほ大小を辨ぜば、自ら度せんことを求めず、物を済ふを先となして、佛果に等流するを稱して大乘と為し、云々。（『勝鬘經義疏』七四ページ）
　二には理に就いて論ぜば、声聞の人は生死を厭ひ涅槃を求む。云々。（『維摩經義疏』五三～五四ページ）

四、太子のお歌
　○　しなてる　片岡山に　飯に飢て　こやせるその旅人　あはれ　親なしに　なれなりけめや　さすたけの君はやなき　飯に飢てこやせる　その旅人あはれ（『日本書紀』）（一五八ページ、二一六ページ）
　○　いかるがの富の井の水　生かなくに　たぎてましもの　富の井の水（『法王帝説』）（膳夫人を悼む）

五、かくて個我を全体に没し、悪魔をも薫化すべき真実の信を共にする大乘の流通は、云々。（一二〇―一二一ページ）